南嶺子

夏

049.1
Ta131n

国立国会図書館　タイトル『南嶺子 : 4巻』 請求記号 049.1-Ta131n

ガラス使用

國立國會圖書館藏書

南嶺子 巻之二

秋齋桂先生著　門人 山中秀蕃 松尾守義 同校

愛蓮黨

○今の儒者やもすれば大日本の大道を詆りて仏者が教を貴び前望を仏陀ころみ神道者流を右にいよでく神祭の加実を失ひ前聖の道をうしなふ甚しきに至れり。儒者が周公孔子の道よのてをさめ学者を歴史文章此上よ情を用ひ仏者そそうぐ主とそろ釋迦弥陀あり他を謗他とそろこむ及べうべく近世の神儒者流の中よそろく卑さそ仏を謗り雑そ云ふまおそ人の情よ悖て他の益あるや。コゾ主とそろ。大日本の大古の風を國史格式よ著く故実よそそ考ひで他を顧ろよそまあつべうべくこが学おびそ云ふ推ぶて他の教を誡

國立國會圖書館 24.9.5 圖書館 25500

国立国会図書館　タイトル『南嶺子 : 4巻』 請求記号 049.1-Ta131n　ガラス使用

もろ〳〵己が志てしむる道の学びざる所より出しと知べし
○我大日本を神國と申するハ國常立尊以来御統易らず。而
して。泰初天皇氏より地皇氏に易る。又人皇氏にうつり。堯に九男二女
あれども舜に譲て。舜も又其子に禅ずして禹に譲る。是より夏殷周の
三代姓を殊にし。秦漢より次第にうつりかはりて。北狄入て天子と称するに
至る。それなればあらたまりきこえて。我大日本ハ天皇氏のまゝにて萬世不易な
るべきなれば。天子を天皇とあがめたてまつり。萬葉集にハ。天子の御事を惟神と
よみたまへり。公式令にも以大事宣於蕃國使詔書ニハ明神御宇日本
天皇詔旨と云へり。今日の天子を現人神とあがめ奉るの文なるを
知べし。然れバ神國といふなり。日本書紀より文徳實録まで五部の國史

にハ見えず。三代實録に至て始て出たり。第十七貞觀十二年二月十五日ノ
告文曰我朝乃神國止憚良礼來礼留故實ヲ云々○貞觀十二年十二
月遣使者於伊勢大神宮告文曰日本朝波所謂神明之國祭利
と云。是より後の書にハ神國の字多く出たり。昔ハ神國といふに及ばず。猶
少く。異域より起れる号なれバ。儒仏の学盛なるに移りて。然れバ対
して也混ぜざらむ為に。清和天皇以来神國といふ号を張と見へたり
○神武天皇より後を人代とし。人皇とも申なり。神代の終を鸕鶿草不
葺合尊と申奉り神武天皇とその御子なくすら無し。神武天皇の兄
皆までも神代の人とのみてあるべし。是より前ハ神代是より後ハ人代と録
すべからざる所なり。然れども日本書紀にハ。太祖國常立尊より。伊弉諾尊

はぐを指て是謂神世七代者也と書れたり俗よく是を天神七代
おびと天照太神より次後を地神五代と号れた古書みなさるゆえ。
天神地祇とひとしく各別のものかり古と称号葉の序を紀要之れも
ちやぶる非代の人名のもじもちごさごろ
なるべし。人の世となりて。すこのみことのみそもじひともじよりそろ
とそくち。皆伊弉諾尊すでと。神世とそこしく神代まで会て。天照大神ろ
八禮も粗そなろしそのれ。男女の世と云れたる。おれた
瓊々杵尊。彦火々出見尊。三代日向よ都をうれた世八。
文物ひろしび。質朴のれはあろ。道のまと
まりてびと神武天皇東よ向よ都やうて軍勢と催しへ入

むしろのよ。朝敵長髄彦ら射ろ矛よ。天皇の兄五瀬命あと
らも矢ひとそ。衆軍機と失ひ。既と敗せんとそろ時。天皇宸襟み神策
をめぐらし。英気を振起ものす。神武紀みえたり。此ろとを称
ろ今日の人情と一なろ。皆より人代くらそ人情今日よおのづき
世ら下事ありと。王慶ら心と書ものえ。
後なれた。人王何代といふ。ことなりて五百年前の記文ものえ。
其後の書ものくそくり。

○博奕て上古よりの禁ありり続日本紀文武天皇元年丁酉七月
乙丑文曰。禁博戯遊手之徒其居停主人亦与罪同罪分○日本
紀略第一延喜五年七月廿八日文曰今月内合人大赦憂真配流。

又捕博戯之輩云〻○雙六樗蒱を博戯として罪を犯すもの。捕亡令。雑律。及天平勝寶六年の官符をもて。角方を用ゐるを禁断云〻。色ゆ骰ものを利ゆ志ゆる者。悉く改うるやう。博奕を初ゆる。利ゆうて犯ものなれど。老慾益ますのやむ時なく。博奕を利ゆる意堪長くして。盗賊ゆおよぶ。あり。人ゆ利ゆる心ゆあり。其利を慎むべし。百錢ゆ下の猪負も。十令ゆ方ゆ令の爭ひも。其意地一つゆよりおこれり。畜ゆ中られ。魚ゆ題ゆ一河豚を食ひ。獣肉を食ひて。死ゆるを顧ざる。獣ゆ勝ざる意ゆ。博奕ゆ勝ざる意ゆ。親子兄弟ゆ。至ても。博ざる意ゆ。

なくて。ハ結衆の心ゆよりて。ゆく〻。ゆく〻。ゆよう不孝不弟の情の原となりて。人倫の道ゆそむくゆ至りて。ゆうもその人を見ゆ盗賊のありと知るべし。予ゆ子孫ゆあらゆ。僧尼令を守れゆ。僧尼作音樂及博戯者。謂双六樗蒱之類也百日苦使。碁琴不在制限。との守れゆ碁ハ結衆ゆよりて。今の僧某寺其院等の法ゆ音樂を習ひて。ゆよう。罪人ゆべし。僧侶ゆいひゆけあり。永大日本ゆ往て。大日本の教を覚ゆ。彼禮を蔑如ゆるの域ゆおゐて。樂人ありて官寺の法樂を古ゆよりあり。僧侶私ゆ修ゆ。令ゆ戻ら。佛説ゆ其罰ゆそむけるの

国立国会図書館　タイトル『南嶺子 : 4巻』 請求記号 049.1-Ta131n
ガラス使用

まじはりありやいなや

○我大日本のミ神国といふにもあらず日本書紀孝徳天皇大化元年七月丈日巨勢徳太大臣詔於高麗使曰明神御宇日本天皇詔旨天皇所遣之使與高麗神子奉遣之使既往短而将来長是故可以温和之心相継而往来而已○續日本紀延暦九年七月左中辨正五位上兼木工頭百濟王仁貞等所上表曰本系出自百濟國貴須王貴須王者百濟始興第十六世王也夫百濟太祖都慕大王者日神降霊奄扶餘而開国と云く孝徳天皇の詔旨に高麗神子とあり百濟王等の表文に曰神降霊と書たるにて知べし漢土の人夷狄の国みゆるにては我本国の事を神州と称し唐僧義浄天竺にゆき著せし西の寄帰傳にも唐の事を始終神州と書り天竺の教を信ずる僧なれば我本国をかく称す況や我大日本ハ元より神国なるをおのくや儒者是を侮言し漢土を中華とうやまひ佛者ハ我国を粟散辺土なりと説我大日本の地は狭し我大日本の五穀を以生命を保禁を侵禮を失ふ其甚甚蔽大なる哉佛経に天竺を際限もなき大国のやうにとかれども凡星辰を以地理を量るの道あり義浄三蔵渡天してみづからに五天竺を悉記すに楊柳の木ありと書しなれば是かくも推考べし我大日本に産まし人大日本の地をめぐりて深山幽谷まで何の木の有ともなく秘るゝへ中くへそれぞれの年数まで六かぞふべけれど唯巡行せるやすくといふ事あれども古ヘよりの方便説を以

25500

実地の論をなすべし

○薮田考証いそのもの功あり云々誹謗の者愚し

ーみ。予尾張より時名古屋より津島へ往て。海東郡とみろ

ーみ。河波手巻くらふ處よ。藪の中みち壺をあて。仕業の瓜茄子の實

人その日ぐ實拾を納を。考あり月名しく瓜茄子よ蓼穂を小し

加へく。毎年九月廿五日熱田社の祭拂と二月初午ノ日の神供よ大ひ赤

よろがて其數も委く記すれた。今年のそれを晒しぬ考ふりいひ

うるものでるるもの。私の方のをふくハ。雛語のる事ー。近代の評者

流。非古のをとなて推しのみて舊記正史よ本ざれ。実をまふるもの

べ

○義好々神祇官の亀卜の家よりそれ。長明々御祖大社の神家の

子孫びや。出家して私方のをとくるを。風雅の方ろ看ね。一家の

洒落なもーもふべし。其家系ろ看てる。先祖救世の業をえ仰

ろ孫ふく。父社の不幸ひつくをぞ。ぜ人ま才知群ま秀しくなれ

むぞくくぐ家の業をとむ為なくていとふよ分てハふくいぶう。

長明ろ法師の傍とゆーみを。方丈記ふくもふく所り。義好ろ後

宇多院崩御の時。出家ろ考れたれ。伊賀へ行て。檜守橋成忠

よやーるれ。其比年も廿七ろなり。成忠の妹中宮小弁よ密通。

伊賀を追出されそのち成忠情あり人ふく。又ふびをやーるれ。

此女を別よ菴を建てをーれ。小弁の通路も近ろ時〇ふぶ又

園太唐

ここの這ものがれぷよろあるそんへ
園太暦もそこうぷその上はれくそ
あるもぷ才を餙る気多し彼書よりの端舎の海よりかつそらふ
魚を出して人こ皆をとうづしさ招よ書より。延喜式よ堅魚を
供御よの。萬葉集よろを詢たい詢
うるる一統のうちあげてうぞで。東醫寶鑑よ松魚とのそろその
なるそれ書なれぞぷそびもあんな。
はまく家をそうろ書と。兒女の譛らんをおされく辭ぬ。本寺
もいろ住僧が還俗して神人と
長明ろ好を神家ろ祝んと亦還俗の俗を寺院の後の裔ん

同義なるべし

○おそそぷやく緑家の人ぷからしをろれからぷうしと云
る世のまうこうなるよ。尾張の方ふくいろうらしと称そのゆく
おぞやなる人ようかぷんがみよ
いひ形もふろて人のむの上よあるのそ。本来西こうろ語るが。
その本来を従俗の寺よ立春大吉祥とくいきうぐて。立春大吉の
四字ハ裏ろそもぷ四りて入るもぷ。邪鬼うこ
まぐるひよ為べし。迷故三界城とぷいそ。
多し。不成日をいむ人ぷ寳をおそ今日を不成日とそうぷ
古書ぷ不成日のまそへぐぷ況や大ぷ成といぷ日よ於てをや。

○世ゝ桐老といふ者あり。甚偉にして流るゝ涙民の艹を惑さるゝかりさるを聞くといふ俚俗くりごとを憑て吉凶を苦樂ひ。癡人論ぜるかなこゝに古も亦亟視よく屬ひて。漢土より渡り桐書多許ありと。説文曰。古之神聖人母感天而生子。春秋元命苞曰。女登生子人面龍顔。始為天子。○史記周本紀正義曰。帝王世紀曰。文王龍顔。○漢高祖本記曰。龍顔美髯。顔の字。增句ゝ額角曰顔と註し。山の至高なる處を山額と稱ひ額を額と書ひ。國語よ天威不違顔咫尺ゝ骨目の際を顔と称するは説文よのごとし。我れそを信よ所ゝ甚むしろ。骨目の際よ天中ゝなるべき桐あり。これ龍ゝ乘龍立天ゝ表ゝ

の象ゝなるよりいふ。太古よりなきよ非ずもあれ。桐よ龍ゝ本文の桐あるものなるべきり。今の桐者哉ゝ人の面をこゝ二十六會ありなぞゝ。虎よ似するゝ虎の性を以一生を従嵐よ似するゝ嵐として額ゝ猫よ見て性事を猫あるく状。向後のゝを嵐あてゝ文ゝ福壽貧大の四十二桐を圖ゝものありて。見て考るもあり。なるべく。気をつけられ合ゞ如くよ其面。家大日本よ桐ゝ法則あれをゝて源氏物語桐壺ゝよる蘇人の桐のかみや油く桐くいふるとゝもあるべく。その表紙の文桐を言ふあるゝ。見ゝ述ゝるかなゝ桐板ゝてそのゝ桐者といふをこのゝ称ゝていそ。

国立国会図書館　タイトル『南嶺子 : 4巻』 請求記号 049.1-Ta131n　ガラス使用

その見るけるを細をかくびに明雲ありてそのつぶねやいるてるあふを。
天台の祖を小くいふとゐなの始なり。明月のうへ
そのうへ雲あれど光を蔽れぬひなんと信西桐一本これ。玉家お祝
ほ見へたり。天智天皇元年四月。鼠産於馬尾いふるあやと通覧といふ
俗ふ白ヒめよ。北國の人まだ南國を識んこと能の犯なり。言葉彼れく
日本よ属今ごとなり。鼠を小方のあよねり馬と南方の午みたしてて
占よるものてそれ望てもせるけるなり。ぺうの占ふ相者と八珠をうる
○聖徳皇太子を歌大日本ふ佛法を弘のふ始祖あり。世よひまそと
南岳恵思禅師の再生なりと傳ふ。家言傳傳。偽姓錄のでる。恵
思禅師傳國王をまるに。宋史あむ。隋の時。天竺國周明王

の子雲中を乗り前生の法華経を取り。南岳の後身なりと
載り續高僧傳よ。唐の玄宗の時。詔を奉和尚よ或人問て。南岳
恵思禅師。再生傳ふまとなるといふ。有やくひーるやこーるの
みくもふ佛ふをうあど。禅師の入寂ろのふ五年
日本書紀を合を看べし。聖徳を諱ろ。南岳の後身なりと
北島大納言のふの誤なり。令集解よ論号なるの門
○遊女のの歌よ漢有游女と詩経ふ
るとうるなれ。今のごく市中品里よあり。船のやごるまよ
群て。旅客を慰ひむーハ泊。升降。
三善為康所録朝野群載分三よ遊女の記一篇あり。其の文を

のそ其世の古をもあらそ○自山城國與の度津淀巨川西行一日謂之河陽従又山陽南海二道之者莫不遵此道。江河南北村邑處々分流向何内國謂之江口。蓋典藥寮味原牧掃部寮大庭莊也。到攝津國有神崎蟹島等地北門連戸人家無絕倡女成群棹扁舟着旅舶以席栧席聲過漢雲韻飄水風經過之人莫不忘家。列盧浪宂 本ノマヽ 釣翁高客舳艫相連殆如無水。蓋天下第一之樂地也。江口則觀音為禍中君小馬白女主殿蟹島則宮城為宗。如意香爐孔雀立牧神崎則河蒜姫為長者孤嫠宮子為命小児之屬皆是俱尸羅之再誕。衣通姫之後身也。上自卿相下及黎庶莫不接林笫施慈愛之為人妻妾致身被寵雖賢人君子。不免此行南則住吉西則廣田次之為祈徵嬖之處殊事自矣泊檜神之一名也。人別剋之數及百千能蕩人心亦古風而已長保年中東三條院幸詣住吉社天王寺此時禪定大相國被寵小觀音長元年中上東門院又有御幸。此時宇治大相國被賞中君延久年中後三條院同幸此寺社狛犬愷等之類並舟而來人謂神化。近代之勝事也。相傳日雲客風人為賞遊女自京洛向何陽之時愛江口人刺史以下自西國入何之輩愛神崎人皆以始見為事之故也。下文長き故略之もし

の妙あるれとも旅泊のちぎりのみにて。

後世の體とも其妙なり。記もやまいでいる名もそくれで西行

を芸妓の名なるべし大江坟言の見遊女詩序一篇本朝文粋第九よろしくもぬる同じくそれを好色のむのごく伝で賢をぬのひよ近ざんやの語おりぬ妾を着よりも老そまで眉を描しや今案茶よりもとく眉墨のいさぎよくも老よりろれぬざと眉つるやそ秦の宮中よおり八字眉を漢の文帝の時よ起りぬれより青黛眉紗眉啼粧等の眉の名ろ方行ます事物紀原等よろくろ。頼朝卿の時志水冠者を遊女別當とやれ也秉給よのも新田義貞が臣越前国金津の城よおりて時等の神とよ妾を永よのそとぞの仲よおのまれ鞍をき号るものそとるっ後の事と名くより。

○傀儡を木偶戯ともと註して今人形芝居の事なるべきよ依て妾の事ぬて起安のやうよて人形芝居の世るをめぐりぬくぬ安のの形をぬ一よそて正義よ以土木為人對象牧人形也そ見よりぬ和歌の題よ傀儡ぐもてぐりとろみぬ安のの形をぬ傀儡ぐもて妾よ張ん

○手少つ時神明憑詰ろ書二ぬを著叔父のく待り培幸因ぬよそやぐ近年の神学者の惑ひを開人ぬろ甚を表を叱ぬるよおぐれ競角の情書のれもてよおとなり学問そむ下おのづく負なるべ。それ才よ富む貧よ貧しく貧よ安ぐ才よ乏よ

国立国会図書館　タイトル『南嶺子 : 4巻』 請求記号 049.1-Ta131n　ガラス使用

古今の通俗明らかよ財の字福富の字を名備てる人を稀なり。ホよ富んぐあよ俗ようく。生を謀んてるホおろかめぐべー。古書を遺で楽ぐ一人て競竟ぐべーよ窮の窮を求ぬよ和容学を好。驚よ長ー。有馬温泉の名よ陽ろ今称へ。予れを才る貧ーく俗のはりく貧ー。学ぶ問よ窮を捨ろ癖やすび叔父の嘉言忘ひ生さろまあーねた近世の科学者話謬ろさをいん。

○亀永十年八月三日明の船。永楽通寶てい銭を多く積来り。号ぢろ慶長よ至ろまで二百年経永楽銭直貴く他の銭と要換号ーて。年ぐ永永要銭の撰つろく。天文九年相摸国北條家ろ下げ知て永永銭の外八用ぐべの俗よおよび関八州号よおろーひーようて

他銭を上方へのぼ一関西の法ぬむろよつひーよ。豊臣家の時又永永銭と他銭まぐ一つよあてた。慶長十一年十二月八日。永楽銭通寶の銭を鋳ひ。永永撰元五十七年ろ其後寛永三年よ。寛永通寶の銭を行きーより銭よ通紀となろーひ。

天野氏話ぢろよ書よのそろ。彼書おようて百巻よおよぶ。杜撰のろおろきものあよれど。世の宝ぢもなるべきろ。亦多イー。天野氏そ尾張のすよして博達好事の一人のく

○古来そ髪髭悉利を僧形ぐ。日本書紀古人大兄皇子請於法興寺佛殿與浴間易除髪髭被着袈裟と云。同紀天武天皇いまぐ大海皇子そて東宮の時天智天皇の給ひを散ずんそて剃除鬢髪とありて。

ひげをそる訓なり。因果経曰過去諸佛為成就無上菩提故捨飾好剃鬚髪 下略 といふ。然るに今世の僧侶を借んあるにげずして鬚をのぞし置て僧異より下て俗髯をかざる。頼政の射られし鵺といふて形の定まらぬもののあるに似て云も侍らぬやうなる類もその部に入べきなり。

○戸令をみるに男子ハ十五以上女子ハ十三以上なれば婚儀を聴とあり。是吾朝本の古法にして異邦の定と別なり。上古ハ始より女の男の家にゆくことハなく、たゞひの媒介をもつて後女の方へ男ゆきて婚礼をとゝのへ従てそのさま〳〵にあらてなり。故に旧記古式に嫁入の式をみえず、婿取といふ作法ハ多く見えたり。○江家次第巻二十に聟取次第をのせて曰。聟公来 中畧 入自中門登自寝殿腋階水取人下階執脂燭件脂燭舅姑相共懐臥之。云々。聟の足のうらをいだきて女の父母其履をいだきふせり。其上聟方よりともしたる脂燭をもて方より迎に出し脂燭の火をひとつに合せて、寝所の燈籠にうつし三日消ず等の故実あり。光源氏の葵上の方へ出むかへ思ひ合すべし。あると以女の方より盃をさし出す事も古ハ方なれども古礼も所得おふるゝ所なり。中古以後ハよめ入とて初より夫の方へゆきて盃ハ古例のごとくて女よりさしはじむるよりて異儀とハおもはれぬ旧記ならひとさがなるべし。

○むかしハまたをとこなる肉女ハ髪を結ばずまたをもちゐたる志ありし髪あげしたるまふなん。伊勢物語に井筒の女とも業平とのさまをうかゞよ。

くらべこしふりわけ髪も肩過ぬ君ならずしてたれかあぐべきといふ
又も知るべし萬葉集十六に古歌一首作者未詳として橘の寺の長
屋にゐたりし娘のひとりはかり髪上たりしかといふも定まらずまた
んとすの意なり。允恭天皇七年ノ紀曰皇后聞之恨曰妾初自結髪
陪於後宮既経多年。是も結髪の二字を以入内のこゝろとしたり
文選古詩蘇子卿結髪為夫妻。李善曰結髪始成人也。されば髪は
いまだ髪を結ざる事のことはりを知るべし。

○淮南子主術篇小審於毫釐之計者必遺天地之数不失
小物之選者惑於大事之挙猶狸之不可使搏虎牛之不可使捕
鼠。といふもの識に宜ならん大行の功あるべき人を細事にしたる小事

は心ある人を大用にかけては其つかふべきあたはず。政道に志さん人は
秤量をもつ舗あきなひさせては。愚人を立て用ひられば一釐一毫を
あらそふ商賈として政をとらせては小鮮を烹るに度々あせる事し
て務ぜしむるが如く。民人甚細密なるにくるしむべし。すべて主君たる人は
其臣を使ふに虎には虎の役を命じ。猫には猫の役をとらせてやりて
なるべく各其職其任にあたりて。改其処をゆるべし虎に鼠を捕役を命じ。
烏に水入をさせよ役をさせより。虎に鼠をとらしむるごとき。不足の情常
小鳥は鳥にも一その役をなさしきても弱のまね為て役義に不通しかの
きはまりもあまり学者にも学問によのたぐひあつて利をこゝろみる礼多く
貧にくるしみと悪を以後世のあさまつりと顧ガケ利にさとくして

国立国会図書館　タイトル『南嶺子 : 4巻』 請求記号 049.1-Ta131n
ガラス使用

真よ学問を好ざる眼よりするが如き学者ありて利なきを富ふあり。論語家よりべし

○孔子家語よ。與善人居如入芝蘭之室久而不聞其香即與之化矣との語あり。然れどかくそあるも平日の交友を選ざるべからず。おのれ善よ染ぶくさんとおもふ。夜盗悪の徒よ交ざるべからず。おのれ善よ染ざれど彼の害うあらんとて不正の友よも交ざる。その洞ざくちの常語よもいへる。勝負ハ天よ任せて。寄巧よ走ざるの道もそむくべからざるものあるの教ありとぞ。人の悪よ染ざるくうとて悪むなかれ。ほりあれど変ずるなかれとぞ古きおよせつくり肖ざるなんやをおそれ盗賊よ

と勧てやちびく人なるべけれた悪の人ごまでそるもあるべし。一統二陥も千人を万人をも困ぢるぐらをねん人て盗賊とおのづよふて。交を絶べし。況や学問さんと思ふ人よさんわれど。学問そ決して成就そねものの如き所とならで教ふらびて教ても益なるべし。

○呂氏春秋の書を摘で曰人をして方よ迷惑せしむるそ必物の為よ遁せしむ。お仙ちものなり。玉をつる人ぞ。ある仙ちるをよおもふぞ。その功をむなしくもるを憂ふ。仙人主といへた指守みして難よく物即よ遁せしむ。実そ仙をを憂ふそれゆ玉を亡ふ主々智あるふ仙亡ぼのほそ忠臣よ陥ざるものの如ふ。

国立国会図書館　タイトル『南嶺子 : 4巻』 請求記号 049.1-Ta131n　ガラス使用

甚似ろよ淹ぢ。漢を婬ひて。偽を信ぜ。なりとぞ。かくの如くせば。品民不帝も亦似ろものて。秦王を惑ひそそ呵々

○仲尼紫の朱を奪そめくはまて。紫の。るものぞ。今の紫そいおろ今の紫根とよおをそろ紅てそ。ひ少古今和方其す。むその根そろ。紫を蔣根をそめてそぬぐあそもおあて染られ。あくそあそろ色そて。朱よ似ろう奪の語あり。仁心今民禁そ間色そう。いよ朱詩よう。四隅の間色を註して。論語大全よのせろや。そよおそそ信そ。階ろ紫を朝服そそろ。蔣根の紫なう。延喜式よ

尺くろ紫のそお方ゆくぶべー。およ東山の九大臣實默公の名同紛は紫端の異のるを。赤縁世俗云此事於と註ーめり。後世女服のさめよそお成て紫草染み似ろんて。茜根染のむさそる色そまぎろくあよ。茜根そおよおびて紛そ朱よまぎのそそおあんや。紫の字もくよろ字よて紫よろ字よあびー。鄭聲の雅楽よまぎびて色をみぎり。利品の忠言よ似く郷家をみぎる。似て真妄化しろ文を喝く神ろ似ろ仏よ源よろ多ー。紫の朱を奪ふよう

ほでそそくろおて。陽製めそーおをとけ。或を又云根清浄後そ。法の新経の法師功徳品の聞香の段ー園覚経の清浄部を私令そ

も甚しきぞ

○方言郷談といふものありそれをもてまなびて和訓の例によりて説る書あり吾大日本より看れば梵語も皆是天竺國の方言なりそれを漢文に譯して經論と仕立るも亦是漢土の方言なり。吾大日本の人をば國の語を本語として他の萬國の語をばその國々の方語と見るべし同じわが國の内にても遠き國を皆その方語ありて京都の語とはたがひたるあり。肥前國佐賀の方語に血古（京言にいふ志多加以）乃於比（京言にいふ於詐）登智（京言にいふ保邪）寿 ○尾張國方語に李于（京言にいふ祭波太）の類諸國にあり音のみにして字義なし漢土の人は其國の文字をもてさだむるを主とする故彼より看れば吾國の語をも日本の方語とすべし吾國にて居て我

國の常談を主とせば漢字を主とせん者なり吾國の風俗なくんば漢土にても蒼頡文字を造り始めし以来音のみにて係つひすらなるべし漢土なれども天地開闢より文字あるにはあらず諸國の方語を登壇必究武備志などにあり考ふべし。

○平安城の人は言語に訛謬なく平安語を都とすれども少しも替て外國は多くは東南西北方角に随ひて大に訛ある事も成是をいふなる事なし十五六歳の時或学者に問ひしぞ人の音聲は水によりてかはる其同流の水をのめば音も亦等し。都は其水清濁の中をゆる故是を飲でその川有をひとしく訛らぬといふ今按ずるに神武天皇以後ひさしく大和に都ありければその時山城は鄙生なりその

附て大和を以音聲の中和をゆる也。そうして。そのてよをむね大和を
わあてまし。倭歌ことわざ也。訓古の字を訓ずるなり。古今集序に
なぞく書よもひのそう。字の訓ずるなり。古今集序に
てよをそへ。漢文よそいふ爲哉乎也の助詞ごとくなるべし。置まことばを
並置ふるまよ並ぶれど。甚文よりてことばをそなぐ。詞を
ぎんがの人々自然しておふをそ善少く訓らねを水のごとくいふてそ通
やまるのあうそのふねを大和う山嵐ふねを遷よく後いばしま安藤の
人のことそ。大日本國の正音とあく。今の大和
ことばもそよ訓ずう水のごとくあそび。京を大日本六十六國及二島
のごとく都会の地なる故。諸國の人の音聲和合してゆづうあひ通ふと

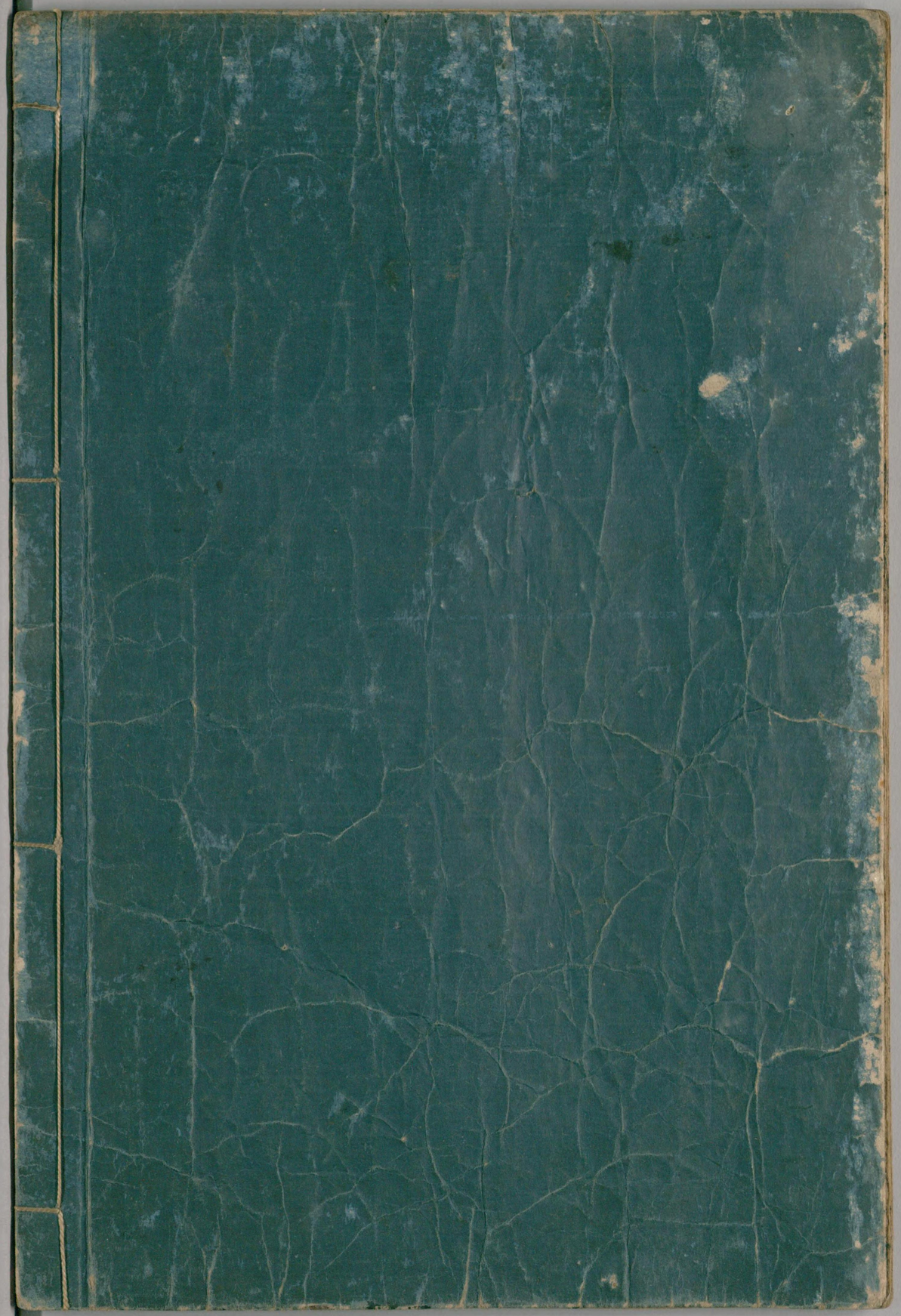
甚中をゆう。一國一邑そうあくて他國の人もまれた。ゆうあそ
ふる物よおよそびそのほ浪の音ふる如。平聲よかとう入聲よりおむ。
あよ諸國の人のふるくあるを以て訓るもつよう。平安城を都武
天皇以後おそ千年の故郷なる故。諸國の音聲合熟して。行方
あくも都會二百年以上よおよそび。又くの如くなるべし。南京告の
呉國ふて荊蛮なんた。都會の地ふなるう。漢土の諸國分一の
正音の國ふかをそ水のよびふ故郷よるをふるべし。

○書經ふ堯の德をあぐるよ。平章百姓ふありて註よ百姓百官と百
官の人よ。種くの姓氏あうふあそび。古の百姓を土民の稱よあそび。
土民を黎民庶人の号あうふそび古の稱ふる而と今日よふぶと。

殊(コト)なる多し。今を以古を証(セム)す。古を証す。古今(コキン)人情の如(ゴトク)ならざるものなり。利(リ)と色(イロ)とに在(アリ)て

池惣

国立国会図書館　タイトル『南嶺子 : 4巻』 請求記号 049.1-Ta131n　ガラス使用



国立国会図書館　　タイトル『南嶺子 ： 4巻』 請求記号 049.1-Ta131n

ガラス使用